

近代化過程における地方都市商業者の関わり

—岩手県花巻地方のインフラ整備を中心に—

深澤 あかね

本論文は、明治中期から大正期にかけて岩手県花巻で行われたインフラ事業に対する、商業者の動向に焦点を当てる。当時、地方都市としての近代的発展のために行われた、電信局設置・鉄道敷設・電気敷設・電鉄敷設・病院開業の5つの事業において、経営に参画、もしくは資本投資を行った人々の人物像を検証した結果、インフラ整備に関わった人々は主に、花巻町人の中で多額納税者として名を挙げている人々と、財力はさほどではないが町会議員などを務める人々、そして花巻以外の地域の資産家から成っていた。そしてその中でも、財力のある花巻町人数名が、様々な事業に大きく投資し、その経営にも関わっていた。

花巻町人たちが町の近代化に尽力し商業町として盛り立てることに熱心であったのは、江戸時代に城下町として栄えた花巻の商人としてのプライドによるものであったと考えられる。

キーワード：近代都市、インフラ整備、商業者、地域社会

1. 問題の所在

本研究は、昭和の中頃までは岩手県で指折りの商業町として栄えながらも、以後町の衰退化が指摘されるようになって久しい、岩手県花巻市の中心商店街を取り上げる。近年はまちづくりの論議が華やかであるが、ここでは過去に視点を移して、江戸時代に開町された当初から城下町・商業町として発展してきた花巻が、商業の中心地としての役割を担う地方都市として近代化していった時期に焦点を当てる。明治から大正にかけての時代に、どのような人物のいかなる活動によって、地方都市としての基盤が整えられてきたのかを検証したい。

近代都市の成立期を担った人々について検証を行った先行研究は、都市史、経済史などの分野に多い。人々のインフラ事業参画の動機をどのように見るかは、研究者の関心によって様々である。一つには、彼らの行動は個人事業への利益還元を期待してのものであり、インフラ事業が経済界全体や個々の商人に及ぼした影響を検証すべきとする経済学的な見方がある⁽¹⁾。また、行政に代わり先頭に立って町への投資を行ったいわゆる「名望家」達の行動は、名望家支配を成り立たせるために不可欠なものであったとする都市行政史からの見方がある⁽²⁾。それに対して近年では、階層性の

上に成り立つ名望家支配を前提とした従来の構造論的な研究への批判として、「名望家」と呼ばれた個人に焦点を当て、彼らの意識と行動を実証しようとする研究も行われている^③。

本論文では、商人を含めた花巻町人達が、上述したような目的の中のいずれかのために事業に参画したという立場には立たない。筆者は、地域における生活者を、「自己利益の追求」「自己の政治的地位の確立」「地域への貢献」などといった複数の動機を個人の中に併せ持つ人間として捉えている。当時、地方の商業町に形成された地域社会で行われていた商業は、「この土地で利益が出ないのであれば別の土地に移る」というスタンスをとる現代の中央資本による商業と違って、自らの生活基盤をその店のある位置に置くものであった。彼らは周囲から、一店主としてだけでなく、あるいは一政治家としてだけでなく、町の中での様々な顔を持つ総体的な個人として捉えられていた。そのような地域社会において、中でも財力があり他の町人達より広い視野を持っていた上層商人が「自分のためにも、この町をよその町より盛り立てなくては」という心持ちで行った行動の一つが、町のインフラ整備への参画であった、という側面に光を当てたい。地域社会の中で、生活の場所を簡単に変えるわけには行かない暮らしを送っていた人々の営為に着目するのが、本論文の目的である。

この点では、地域の振興に尽力する「名望家」の存在を重要視している内藤（2005）のスタンスが、上述した本論文の分析視角と近いものと言える。内藤は、小樽の「名望家」2人の人生を細かく検証しその盛衰過程を明らかにすることで、彼らや彼らに象徴される多様な社会階層を生み出した、都市小樽の再生産過程に迫っている（内藤：2005）。そして近代日本が自由と人権において大きな制約を有していたことを踏まえた上で、『『名望家』に現代的な光を当てることで市民とコミュニティの要請する都市を論じることができるのではないか』と結論づけている（内藤：2005）。

筆者は、町の有力者について内藤（2005）と同様の認識を持った上で、彼らの後継者達に焦点をあてたいと考えている。後継者といっても、特定の人物の跡継ぎに限るわけではなく、世代的な後継者という意味合いである。従ってこの問題は、地域における「名望家」層の再生産過程と言い換えてもよいだろう。それは、若者達が地域社会一離れられない土地の縁の中一に生まれ、常に関わりを保つことが前提となっている人々の間で育ちながら、そこで家督を継ぐ自覚を養い、「地域において期待される役割」を担うだけの資質を備えてゆく過程である。そしてその過程における若者達の活動が、町にどのような活力を与えてきたのか。それが一番の問題意識である。

このような問題意識を踏まえつつ、本論文では前段階として、青年達の活動に存立基盤を与えてきた、花巻の町の社会構造を整理したいと考えた。その方法として、花巻におけるインフラ整備の検証を行う次第である。ただし「名望家」の概念規定は難しいため、本論文では登場する花巻町人に対し「名望家」という言葉は用いない。本論の進め方としては、まず町のインフラ整備の経緯を調べることで、近代的な花巻の町が誰の手によって整えられてきたかを確かめる。そして、その人々の人と成りを検証することで、近代的な地方商業都市としての生成期であった明治中期以降大正期にかけての、花巻の近代化を担った立役者達の姿を明らかにしたい。

2. 研究方法と調査地の概況

(1) 研究方法

本研究の対象とする時代は近代であるが、花巻は、その時期の資料の保存が少ない地域である。昭和10年の花巻川口町・花巻町合併時の役場移転に伴う行政資料の散逸、さらに太平洋戦争末期の空襲に伴い町の中心部で大規模な火災が起きたことによる中心商店街の資料の焼失などが、その理由とされている。

従って本研究では、戦前の日本各地の状況をまとめた貴重なデータベースである、『日本全国諸会社役員録』(明治32年～明治45年、以下『会社役員録』と記す)⁽⁴⁾、『銀行会社要録』(大正9年～大正11年)、『都道府県別資産家地主総覧』(以下『資産家地主総覧』と記す)を主要な資料として用いた。『会社役員録』『銀行会社要覧』に年代的制限(明治26年～45年、大正9年～11年発行)があるため、研究の対象を明治中頃から大正末期にかけての時期とせざるを得なかったが、本研究の目的は、近代的商業町としての社会基盤を整えてゆく段階においての各種インフラ事業への花巻町人の参画状況を把握することであり、これらの資料から、各事業に関わる企業の動向がある程度得られたことから、研究対象時期の設定は適当であると考えている。

またそれらのデータベースからは得られない詳細情報を補い、当時の人々の人と成りが読み取れる論文内容とするために、『花巻市史』(熊谷:1968)や『花巻市上町の歴史』(熊谷:1972)等の町内会史、『花巻の先哲一財団法人花巻病院創立満40周年記念編集一』(花巻病院:1963)、『財団法人総合花巻病院創立80周年記念写真集』(総合花巻病院創立80周年記念写真集編集委員会:2004)、『栄光の軌跡花巻電鉄』(佐々木:1989)といった社史、また旧制花巻中学校の教師をしていた八木英三が記した随筆である『花巻町政史稿一花巻市制施行記念』(八木:1955)、『稗貫風土記人物篇』(八木:1951)、そして明治中期から大正末期にかけての地元新聞などを参考とした。これらの資料は、その性格上、信憑性の低い情報が含まれることはやむを得ないため、ほぼ確実と思われる情報に限り引用し、必ず出典を付けることで対処した。

本論文の研究方法をまとめると、まずはじめに、明治中期から大正末期に行われたインフラ事業である電信局設置・鉄道敷設・電気敷設・電鉄敷設・病院開業の5つの事業を取り上げ、それらの経営に参画、もしくは資本投資を行った人々を、『会社役員録』『銀行会社要録』『花巻市史』その他の資料を用いて確認する。次に、その中でも2つ以上の事業に参画している人々を取り上げ、その事業参画状況を一覧表にまとめた上で、『資産家地主総覧』を用いてその人々の家の財力を検証するとともに、『花巻市史』や地域に残る社史、随筆、新聞等を参考に彼らの人と成りを振り返る。

(2) 調査地の概況

岩手県花巻市は、江戸時代の初期に南部氏の支城が置かれた際に城下町が開かれ、以来発展を続けてきた。城下町は、開町の順に、城の北側は四日町、城の南側は川口町、城の北側で四日町よりも城寄りの町は一日市と名付けられた。はじめは開町の早かった四日町が開けていたが、後には「川口町が三町の中で次第に発展して」きていたと、『花巻市史』の編集に携わった熊谷は述べてい

る（熊谷：1972）。

明治に入ると、戊辰戦争で旧幕府側についた南部藩の処遇は度々変わったが、最終的には南部藩であった地域の大部分と伊達藩の一部、そして一関藩であった地域などを合わせて、岩手県が置かれた。そして県内では、南部藩の本城があった盛岡に県庁、一関藩の本拠地であった一ノ関に支庁が置かれ、この2つの町が地方中枢都市としての性格を強めてゆく（森：1974）。

江戸時代を通して南部藩の支城が置かれ城下町として発展していた花巻の町も、明治初期の県治行政の度重なる変更で翻弄され⁽⁵⁾、そして明治12年には、最終的に岩手県内18郡役所の一つを置く町に過ぎなくなっていた。その当時の町の様子としては、城の払い下げに伴う混乱が続き、「明治の中期ごろまで経済事情で大迫に、交通の繁栄については黒沢尻に及ばなかったよう」である（熊谷：1972）⁽⁶⁾。このように県内での行政的な位置付けは高いものではなくなり、明治維新に伴う町の混乱も甚だしかったが、本論文で論じていくように、花巻の町はやがて城下町であった頃の勢いを取り戻し、県下でも盛岡に次ぐ大きな商業町として発展してゆく。

その花巻の町場では、明治に入り、川口町と呼ばれていた地域は里川口村となり、四日町、一日市であった地域は花巻村とされた。さらに明治22年の町村制では、近隣の村を併合して、花巻川口町（里川口村、南万丁目村と高木村の一部）と花巻町（花巻村、北万丁目村、高木村の一部が合併）が誕生した。明治22年段階の資料では、花巻川口町の人口は4,271人、花巻町の人口2,409人となっている。この際、ともに花巻の町場を形成していた花巻川口村と花巻村が合併しなかった理由について、当時の「新町村区域資力調べ」という資料には、（花巻村は）「従来里川口トモニ花巻ノ総称アレトモ延長ナル坂路ヲ以兩地ヲ隔テ民情相協ハス人民亦分離シテ一町ヲナサンコトヲ冀望シ資力ニ於テ兩町トモ不足ナキヲ以テ各独立トス」（熊谷：1968）とある。このように、城を境にして南側と北側にそれぞれ発達した川口町（花巻川口村）と四日町・一日市（花巻村）は、各々が独立した商業町を形成しており、両町の人々は牽制しあう仲であった模様である。その事実は他の資料においても随所で触れられており、現在でも古老に尋ねると、「昔はあっち町こっち町と呼んで、仲が悪かったもんだ」という答えが返ってくる。

このような事情もあり、以来、昭和10年に花巻町が花巻川口町に併合されて新生「花巻町」が誕生するまでは、花巻の町場は2つの行政単位に分かれていたことになる。そしてこの2町に、近在の14町村（大迫・内川目・外川目・亀が森・新堀・八重畑・矢澤・好地・八幡・湯本・宮野目・根子・湯口・太田）を加えて、稗貫郡を成していた。

大正5年の段階では、花巻川口町の人口は6,393人、花巻町の人口は3,389人となっており、花巻川口町が花巻町の約2倍という比率を保ったまま、双方の人口が増加していることがわかる。

3. 近代花巻の都市基盤整備

明治期に入り日本の近代化が進められていく中で、花巻の地方都市としての整備も行われていった。電信、電気、鉄道など様々な近代都市の基盤となる設備の必要性を説き、行政に働きかけ、自らその資金を拠出して行ったのは、主に花巻町人達であった。

本節では、事業が行われた順に、電信局、鉄道、電気、電鉄、病院の設立の経緯とそれに携わった人々を明らかにしていく。なお、本研究の対象年代が明治・大正期であるため、昭和期以降に敷設された水道やガス等のインフラ整備については、ここでは割愛する。

(1) 電信局 (電報電話局)

花巻に電信局が設置されたのは、明治15年のことである。当時、岩手では盛岡と一ノ関にしかなかった電信局を花巻にも設置しようと尽力したのは、佐藤庄兵衛 (花巻川口町鍛冶町：商業) と梅津喜八 (花巻川口町上町：米穀商) であった。彼らは、既設地より十里以内では特設不可能という障害を、他地域での前例を調査することで乗り越え、また敷地・建築費・経費の総額を八百円と見積もり、それを約20名の地方有志に割り振るなどして (熊谷：1968)、電信局設置にこぎつけた。寄付拋出者約20名については、残念ながら資料が残っていない。

この時代、地方で収穫された米は、地主から産地米穀商の手に渡り、大消費地の廻米問屋や米穀卸売商の元に集められた後、小売商へと売却されていた。電信局の存在は、この遠隔地取引に携わる者にとって、他に対し優位に立てるかどうかなという問題に大きく関わるものであった (石井：1994)。

県下でも屈指の米穀商であった梅津喜八らにとって、盛岡・一ノ関周辺の人々に恩恵を与えていた電信局は、他地方の商人との競合に競り勝つためには私費を投じてでも手に入れた文明の利器であったと考えられる。『花巻市史』には、「当時、米穀の取引については、各地でその敏活を争うの風であったが、花巻に電信局が設置されたことによって、この地方の商業者は他に一步を先んずることが出来るようになり、そしてその結果、「花巻は水沢以北、紫波以南の中心をもって目されるに至った」と記されている (熊谷：1968)。

(2) 鉄道

東北本線初の支線として開通した岩手軽便鉄道について、主に『花巻市史』 (熊谷：1968) や『花巻町政史稿』 (八木：1955) を参考に見て行こう。

東北線 (明治42年「東北本線」に改称) の上野―青森間が開業したのは明治24年であったが、その後太平洋側・日本海側の人々は東北線と連絡する横の鉄道の建設を要望するようになった。やがて軽便鉄道法が制定され地元による私鉄開通が認められたため、全国各地で軽便鉄道の開通が相次いだ。岩手では東北本線と沿岸部をつなぐルートが複数考えられたが、花巻の政治家や釜石の経済人の活動が実り、花巻―釜石間の岩手軽便鉄道計画が本格化した。この鉄道と東北本線が交差する花巻では、岩手で初のターミナルを形成することとなった (佐々木：1989)。

岩手軽便鉄道会社は、明治44年、資本金100万円で設立された。全県から、約二千人の株主が投資をした。大正5年時点での数字となってしまうが、花巻町人で大きな投資をした人物としては、瀬川弥右衛門 (648株)、梅津東四郎 (539株)、宮澤善治 (358株)、橋本喜助 (150株)、松田忠太郎 (156株)、佐藤秀六郎 (100株) などが挙げられる (一株50円、渋谷：1989)。瀬川弥右衛門の648株

表1 花巻電気株式会社役員の変遷

	瀨川弥右衛門	梅津東四郎	宮澤善治	梅津友蔵	菊池忠太郎	橋本喜助	佐藤庄兵衛	照井孝介	市野川周助	松田忠太郎	宮澤政次郎	阿部晃	梅津善次郎	佐藤秀六郎
	花巻町 農業・貸金業	上花巻川口町 米穀商・貸金業	花巻川口町 荒物商・元売捌	花巻川口町 保険会社代理店	城内川口町 会社重役	上花巻川口町 呉服商	花巻川口町 商業	花巻町 町長	下花巻川口町 陶器商	花巻町 米穀商	花巻川口町 呉服古着商	花巻小学校代用教員 ↓裨貫郡湯口村長	上花巻川口町 鋳物商	花巻川口町 鍛冶業
明治45年	③	③	③	①	②	④	④	④						
大正4年	③	③	③		①	④				④				④
大正9年	③	③	③		①	×			③	④	④	④		
大正10年	③	③	③		①	④			③	④	③	③	④	

注) ①社長 ②専務取締役 ③取締役 ④監査役

出典：『栄光の軌道花巻電鉄』、『銀行会社要録』（大正9、10年）を元に筆者作成

は、岩手軽便鉄道の社長に就いた金田一勝定の600株をも越える投資額であることが、特筆できよう。郡市別に見ると、裨貫郡の投資家達は全体の22.5%を担っている。その他、沿線の上閉伊郡では29.8%を負い、釜石で製鉄所を経営する横山久太郎は一人で7.5%に当たる1500株を投資している（熊谷：1968）。

岩手軽便鉄道会社の役員は、社長には金田一勝定、常務には中野協蔵が就いた。推されて社長となった金田一勝定は、盛岡銀行、盛岡電気工業、盛岡交話会（商工会議所の前身）等に名を連ねるなど、岩手県財界の重鎮として目下活躍中の人物であった。常務の中野協蔵は花巻出身で、当時上閉伊郡の郡長を務めていた人物である。また花巻町人では、梅津東四郎（花巻川口町上町：米穀商・貸金業）と瀨川弥右衛門（花巻町：農業・貸金業）が役員に就いた。

この岩手軽便鉄道は、大正4年までに花巻―仙人峠間が開通したが、仙人峠を開削し釜石へ開通するのは民間の力では難しく、国有化を求める運動が行われた。花巻町から出た貴族院議員の瀨川弥右衛門をはじめ多くの関係者の中央への働きかけが実り、国有化が認められたのは昭和10年、そして花巻―釜石間が開通したのは、太平洋戦争を隔てた昭和25年のことであった。その間、花巻の主だった経済人・政治家達が陳情に尽力している（八木：1955）。

このように、岩手では東北本線初の支線となった岩手軽便鉄道が私鉄として開業したという事実は、沿線有志の財力と活動に掛けた情熱の大きさを示す指標と言える。

(3) 電気

花巻の電気事業は、電信事業と同じく盛岡・一ノ関に次いで県下で3番目に始められている。花巻電気会社は、明治45年1月に設立認可を受け、同年大正元年11月に開業した。本社は花巻川口町に置かれ、当初花巻川口町、花巻町、湯口村、根子村に電気を供給した（佐々木：1989）。開業の経緯やそれに携わった人物、開業後の事業展開などについての資料は得られていないが、花巻電気会

社の歴代役員の名前を地方史や『銀行会社要録』を元にまとめているので、表1として記す。

役員の詳細については次節で検討するが、若干補足すると、明治45年設立当初に社長となった梅津友蔵については、花巻川口町の商人だが詳しい人物像はわからない。その後大正4年以降の資料で社長となっている菊池忠太郎は、近在の村に生まれ東京の大学で学んだ後、花巻に戻り地元の発展のために尽力した人物であった。梅津東四郎、宮澤善治、橋本喜助、佐藤庄兵衛、市野川周助、宮澤政次郎、佐藤秀六郎は花巻川口町の商人である。それに対し、花巻町の町人が瀬川弥右衛門と松田忠太郎のみであったことは、特筆できよう。照井孝介、阿部晃、梅津善次郎は、町長や村長などとして行政で活躍した人物達であった。

『栄光の軌跡花巻電鉄』（佐々木：1989）によると、大正元年に創業した花巻電気会社は、大正10年には盛岡電気工業に吸収合併されている。同時期に遠野電気工業も盛岡に吸収合併されており、各地方の企業が県都盛岡の企業に吸収されて行くのは全県的な動きであった。合併の際、元の花巻電気会社から盛岡電気工業の経営陣（全14名）に迎えられたのは、取締役となった菊池忠太郎（元花巻電気会社社長）と宮澤直治（花巻川口町鍛冶町：荒物商・元売捌）、監査役となった瀬川弥右衛門（花巻町：農業・貸金業）の3名のみであった。

(4) 電鉄

前項で取り上げた花巻電気会社は、大正時代に開業し昭和40年代にモータリゼーションに押されて廃業となるまで市民や観光客の往来を支えた花巻電鉄の経営にも携わった。ここでは、『栄光の軌跡花巻電鉄』（佐々木：1989）を参考に花巻電鉄の歴史をなぞってゆく。

従来、町場から約20キロ離れた花巻西部には鉛、大沢、志戸平などの温泉が開けており、かごや馬車を雇ったり歩いたりして訪れる多くの湯治客で賑わっていた。大正2年、花巻電気会社では、その豊沢川沿いの温泉郷に電車を走らせることを計画し、花巻電気軌道会社発起人会を発足、花巻電気会社として工事は進められ、大正7年には花巻駅—志戸平温泉間が開通した。この区間では東北本線と交差するための、県内初の跨線橋も建設された。また同大正7年、温泉軌道株式会社を設立するとともに（役員は表2参照）、志戸平—西鉛温泉間で鉱山用に使われていた馬車鉄道を買収し、一般輸送を始めた（佐々木：1989）。しかし大正10年には、花巻電気会社が盛岡電気工業会社に吸収合併されることとなり、翌年温泉軌道会社も吸収された。花巻電気会社の重役の中からは、菊池、宮澤（直治）、瀬川の3名が盛岡電気工業の経営陣（全14名）に迎えられた。大正14年には、花巻—西鉛温泉間が全線電車となっている。

一方、市街地から北西8キロほどの所にある台温泉へ向けても、別の電車の敷設計画が持ち上がる。こちらの運動の主体となり、台温泉の余った湯を町寄りの土地に引き保養地にしてはどうかという遠大な計画を練ったのは、一時期県下一の豪商・豪農とも言われた伊藤儀兵衛の次男篤次郎（花巻町）と⁷⁾、台温泉の小瀬川金吾（湯本村：旅館業）、杉村勸兵衛（湯本村：窯業）らであった。やがて岩手軽便鉄道や花巻電気会社とも利害が一致し、3グループ提携で「台鉄道株式会社」が設立された。この会社の役員については資料がない。この時作成された「台鉄道計画」の中に書かれ

た総況は、次のようなものであった。

〔総況〕現在の台温泉のみを目的として鉄道を経営すればその効果は薄い、本鉄道の起点とすべき花巻は国有鉄道東北本線中重要な位置を占め、岩手軽便鉄道線並びに花巻電気会社の電車線を接続するにあり。盛岡市を距たること二十二マイル（三五・ニキロ）に過ぎず。よって現在の台温泉のほか、新温泉場と遊園地を設け、花巻よりこの間に電気鉄道を敷設す。延長わずかに五マイル二分（八・三ニキロ）ここにはじめて県内唯一の慰安保養場を実現す。すなわち本鉄道を敷設し、大いに一般来遊の便を開き、併せて地方開発に資するところあらんとす（佐々木：1989）。

このように「台鉄道計画」は、鄙びた一温泉郷に過ぎない土地に、旅館や別荘、遊園地など従来の湯治客以外の人々をも惹きつけるような施設を備え、そこに東北本線と連絡する鉄道を引くことで、一大観光地として開発しようという壮大な計画であった。

大正8年には国からの鉄道建設の免許状が降りた。その後伊藤篤次郎の急逝により事業の続行が一時危ぶまれたが、時同じくして盛岡電気工業と花巻電気会社の合併の話が起こり、「台鉄道計画」も盛岡電気工業に引き継がれることとなる。やがて、台鉄道は大正14年に開通、台遊園地新温泉は新たに「花巻温泉」と名付けられ、県内有数の保養地として盛況を博す。

このような経緯により盛岡電気工業では、鉛線（花巻―西鉛温泉間）と花巻温泉線（西花巻―花巻温泉間）の両電鉄の運営を引き継ぎ、毎日午前6時から午後10時にかけて一時間にほぼ1本の電車を走らせて（大正15年時点）、温泉客と沿線住民の交通の便を図っていたが、別会社を設立し交通事業に専念した方が業績増につながると判断し、大正15年、「花巻温泉電気鉄道株式会社」を盛岡電気工業から独立させ、両電鉄の経営に当たらせた。

表2は、この「花巻温泉電気鉄道株式会社」と、鉛線を開業させた元の「温泉軌道株式会社」との役員を整理した表であるが、それを見ると、「温泉軌道株式会社」は、当時花巻電気会社の社長であった菊池忠太郎が社長を兼任し、その他にも瀬川弥右衛門、梅津東四郎、宮澤善治、市野川周助、

表2 温泉軌道株式会社役員の変遷

	菊池忠太郎	瀬川弥右衛門	梅津東四郎	宮澤善治	宮澤直治	市野川周助	大矢馬太郎	小野崎篤造	藤井三右衛門	宮澤政次郎	平賀千代吉	金田一国土	坂水潔	一戸三矢	中村治兵衛	金田一直太郎	昆清蔵	葛西万司	村井昌八	柴田兵右衛門	佐々木勇吉	金田一光	太田孝太郎	吉田万太郎	萬昌一郎
	↓花巻電気社長重役 盛岡電気取締役	↓花巻町農業・貸金業 盛岡電気取締役	花巻町米穀商 花巻電気取締役	花巻町荒物商 花巻電気取締役	盛岡電気町荒物商 花巻電気町取締役	花巻町陶器商 花巻電気町取締役	盛岡農業 盛岡電気監査役	稗貫郡宮野目村農業 稗貫郡湯口村農業	花巻町呉服商 花巻電気町取締役	盛岡電気社長 盛岡電気常務取締役	花巻町町呉服商 花巻町町醸造業	盛岡電気社長 盛岡電気常務取締役	盛岡電気技師 盛岡電気技師	盛岡電気技師 盛岡電気技師	盛岡電気技師 盛岡電気技師	盛岡電気技師 盛岡電気技師	盛岡電気技師 盛岡電気技師	盛岡電気技師 盛岡電気技師	盛岡電気技師 盛岡電気技師	盛岡電気技師 盛岡電気技師	盛岡電気技師 盛岡電気技師	盛岡電気技師 盛岡電気技師	盛岡電気技師 盛岡電気技師	盛岡電気技師 盛岡電気技師	和賀郡十二鎗村米穀商
大正7年 温泉軌道株式会社	①	③	③	③		③	③	③	④	④	④														
大正15年 花巻温泉電気鉄道株式会社	②	③	④		③		③	④				①	②	②	③	③	③	③	③	③	③	③	④	④	④

注) ①社長 ②常務・常勤取締役 ③取締役 ④監査役
出典：『栄光の軌道花巻電鉄』を元に筆者作成

宮澤政次郎が電気会社の役員と兼任している。花巻町の町人の参画が瀬川弥右衛門のみとなっているのは、この電車が花巻川口町から（花巻町を通らず）そのまま西へ伸びているためであろうか。

その後花巻の電気事業と電鉄事業が盛岡電気工業に吸収され、大正15年に再び独立させられた「花巻温泉電気鉄道株式会社」の方は、役員陣を見ても既に花巻が経営の主導権を持つ事業ではなくなっていることがわかる。全20名の経営陣中、花巻人では、菊池忠太郎（元花巻電気会社社長）は常勤取締役、父宮澤善治の後を次いで盛岡電気工業の経営に参画していた宮澤直治（花巻川口町鍛冶町：荒物商・元売捌）と瀬川弥右衛門（花巻町：農業・貸金業）は取締役、梅津東四郎（花巻川口町上町：米穀商・貸金業）は監査役に就いた。また温泉軌道会社時代から花巻電鉄の役員として関わっていた、小野崎篤造（稗貫郡宮野目村：農業）と大矢馬太郎（盛岡）も役員となっている。

以後、車社会が到来するまでの間、鉛線は昭和44年まで、花巻温泉線は昭和47年まで、地元の人々や観光客の重要な足として活躍した（佐々木：1989）。

(5) 病院

花巻初の総合病院が開院したのは、大正12年のことである。

それ以前、花巻川口町で外科医院を営みながら、総合病院設置の必要性を痛感していた佐藤隆房は、大正11年、花巻電気会社の社長から盛岡電気工業の取締役となっていた菊池忠太郎に相談を持ち込んだ。賛同した菊池は、川口町町会議員の宮澤政次郎、さらには川口町長梅津善次郎の説得に当たった。すぐに賛同者は増え、病院設立準備の段となり、翌年には新築移転が決定していた稗貫郡農学校の跡地を、町有の状態で貸与してもらえることが決まった。また佐藤隆房は、旧校舍買受のため1500円の町への寄付を行い、旧校舎の永久無料使用を許されている（総合花巻病院創立80周年記念写真集編集委員会〔以下『編集委員会』と記す〕：2004）。

新しい病棟の建築に要する不足金3万円については、盛岡銀行頭取の了解を得て、町有志の保証により出資されることとなった。その賛助者は、以下の23名であった。

市野川周助（花巻川口町下町：陶器商）	三鬼鑑太郎（会社重役）
島和右衛門（花巻川口町豊澤町：荒物商）	瀬川弥右エ門（花巻町：農業・貸金業）
佐藤金太郎（花巻川口町吹張町：酒造業）	松田忠治（花巻町：米穀商）
平賀千代吉（花巻川口町鍛冶町：醸造業）	佐藤伊惣治（花巻町：米穀商）
箱崎庄吉（花巻川口町吹張町：製造業）	平野健蔵（花巻町：米穀商）
宮澤善治（花巻川口町鍛冶町：荒物商他）	瀬川兆次郎（花巻町：不明）
伊藤和三郎（花巻川口町鍛冶町：呉服商）	瀬川松次郎（花巻町：不明）
菊池忠太郎（会社重役）	瀬川彦助（花巻町：不明）
橋本喜助（花巻川口町上町：呉服商）	小原政治（花巻町：薪炭商）
佐藤秀六郎（花巻川口町鍛冶町：貸金業）	梅津善次郎（花巻川口町上町：鋳物商）
梅津健吉（花巻川口町上町：米穀商他）	宮澤政次郎（花巻川口町豊澤町：呉服商）
阿部晃（稗貫郡湯口村：湯口村長）	（編集委員会：2004）

花巻川口町の商人が12名、花巻町の商人が8名と、ほとんどが町の商人であり、その他の3名は、電気会社や岩手軽便鉄道で活躍していた菊池忠太郎、三鬼鑑太郎と、花巻電気にも携わっている湯口村長の阿部晃であった。

大正12年12月、開院式が行われた。大正13年に新病棟の工事が完成し、運営体制もほぼ整った。この時点で、入院患者60名弱、外来80名内外であった（編集委員会：2004）。

(6) 小括

以上、花巻における電信局、鉄道、電気、電鉄、病院の設立の経緯を見てきた。

全てに共通する点として、花巻町人達が主となり、私財を投じてこれらのインフラを整備してきたことが挙げられる。病院を除けば、いずれも後には国や県の企業に吸収合併されてゆくことになる事業であったが、彼らは、新しい事業の必要性を訴え、事業開始が決まると経営・資金両面でその確立期を支えたのであった。

さらに、以上5つの事業を振り返ると、複数の事業において投資、または経営への参画を行った人物が存在することがわかる。次節では、それらの人物や家に焦点を当て、花巻の町の中で占める位置を検証してゆく。

4. インフラ整備参画者の人物像

前節でとりあげた各事業に携わった人々を一覧表にし、各個人の名の下に集計し、そして役員・投資家として名前が出た回数の多い順に並べたものが、表3である。本節では表3を基に、『資産家地主総覧』その他の資料を交えて、花巻の社会基盤整備を支えた人々の人となりやその家の財力を見て行く。特に、表3に登場する人々の公職歴や納税額については、表4「花巻川口町町議会議員の変遷」（ただし花巻町の資料は得られていないため花巻川口町の人物に限る）、表5「納税額及び多額納税者順位」としてまとめた。

表3の作成方法について説明を付しておく。まず、

- ・電信局設置に尽力した2名
- ・岩手軽便鉄道の役員を務めた人及び稗貫郡内の岩手軽便鉄道への30株以上の投資者⁽⁸⁾
- ・花巻電気会社の役員を務めた人（表1）及び稗貫郡内の花巻電気会社への10株以上の投資者⁽⁹⁾
- ・花巻電鉄の事業の役員を務めた人（表2）
- ・総合花巻病院開業に賛助した人々

を、各事業に携わった者とみなした。そして親子関係にある者は「家」という1つの単位で扱うこととした。その総人数は83名（75軒）に及んだが、表3では、2つ以上の事業に携わった人物（家）28名（軒）のみを取り上げた。その28名（軒）について、携わった事業数が多い順に並べた。その際、投資のみよりも役員就任を重要な関わりとみなし、まずは役員就任した事業数で分類し、その中で役員就任期間の長さや他事業への投資状況などを鑑みて事業への関わりの深さを判断し、掲載順を決定した。

表 3 続表

佐藤金治	米花穀泰商口町	電氣 鐵道	36 14	×	×	×	×	×
大場永吉	小花間泰物商口町	電氣 鐵道	32 20	×	×	×	×	×
佐藤庄助	呉服泰商口町	電氣 鐵道	30 40	×	×	×	×	×
阿部理吉	農神農實郡湯口村	電氣 鐵道	39 50	×	×	×	×	×
島和右衛門	花子豊泰荒物澤商口町	病院 電氣	24 〇	×	×	×	×	×
小一 九八 五七 一助	農神農實郡八重畑村	電氣 鐵道	44 240	×	×	×	×	×
箱崎庄吉	花吹子張泰種町川口町 製菓製造業	病院 電氣 鐵道	16 〇 42	×	×	×	×	×
在一 九八 四八 五〇 伊勢治	米花穀泰商町	病院 電氣 鐵道	〇 36 40	×	×	×	×	×
平野健蔵	米花穀泰商町	病院 電氣 鐵道	〇 24 60	×	×	×	×	×
佐藤秀六郎	花子銀泰金治業商口町	病院 電氣 鐵道	〇 100 100	×	×	×	×	×
阿部 一三 九八 三七 七一 七助	花子銀泰小學校代用教員 ↓神實郡湯口村長	病院 電氣	〇 1	×	×	④	③	
梅一 九八 五七 〇四 善次	花子銀泰物町商口町	病院 電氣	〇 2	×	×	×	④	
梅津友蔵	花陰泰會社代店理店	電氣 鐵道	120 20	①	×	×	×	×
松田忠治		病院	〇					
一松 九八 五九 九一 八忠太郎	米花穀泰商町	電氣 鐵道	100 156	×	④	④	④	×
平賀ツル		電氣 鐵道	16 42	×	×	×	×	×
平賀千代吉	釀造泰業町川口町	病院 電鉄	〇 1			④		×
一三 九八 四六 三三 三六 三郎	會社泰重役	病院 電氣 鐵道	〇 40 100	×	×	×	②	②
橋本喜助	花子銀泰商口町	病院 電氣 鐵道	〇 100 150	×	④	×	④	×
大矢馬太郎	盛園業園	電鉄 鐵道	1	×		③	×	×

表4 花巻川口町町議会議員の変遷

	平賀 興助	佐藤 庄兵衛	宮澤 善治	佐藤 庄助	市野 川周助	梅津 友蔵	島和 右衛門	梅津 東四郎	宮澤 政次郎	橋本 喜助
明治34年	○	○	○							
明治35年	○	○	○	○						
明治36年	○	○	○	○	○					
明治41年 (3人不足)		○	○	○						
明治43年		○	○	○	○					
大正2年			○		○	○				
大正6年			○		○		○	○	○	
大正10年			○		○		○	○	○	○
大正14年			○					○	○	○

注) 明治34年から大正15年までの間、町会議員を務めた人物は62名であったが、ここでは表3に登場する人物のみの在職期間を表に示した。ただし当時の町会議員は、納税額により被選挙権が区別されており、一概に選出回数の過多を比べることはできない。また明治41年については、18名の定員中3名の名前が確認できなかった。

出典：『花巻川口町議会議録』(明治34年～大正15年)を元に筆者作成

ただし、彼らを携わった事業の数の多さの順で並べたことに関しては、あくまでも分析のため便宜上行ったことであり、厳密に当時の彼らの活動の活発さを順位付けるためのものではない。本論文で扱った資料は、年代的にも量的にも彼らの活動の全体像を測るには不十分なものであり、この試みは明治半ばから大正末期までの間に花巻で行われたインフラ整備という制限の中で、活動の断片を拾い集めて羅列し、彼らの生き様の一片に迫るに過ぎない。

ここではまず、各事業への参画状況が他の人物(家)より著しい3つの家を検証する。その後に、2つの事業において役員に就任している8名(もしくは軒)、役員として参画した事業は1つであるがそれ以外の事業へ投資を行っている7名(軒)、そして役員は1つも務めていないが複数の事業に資本投資をしている10名(軒)について、見て行きたい。

(1) 事業参画が著しい3つの家

表3を見ると、梅津・瀬川・宮澤(善治)の3つの家が、他に抜きん出て各事業へ参画しており、さらにその参画が一代で終わらず後継者によって続けられていることに気付く。ここでは、この3軒について順に検証してゆく。

(i) 「山喜」の梅津家

花巻川口町の上町で江戸時代から商いを始めた「山喜」の二代目、梅津喜八(天保14年[1843]～明治42年[1909])は、仙人峠(花巻・遠野方面から三陸の釜石に抜ける峠)を越えての行商から一代にして豪商となった人物である。明治12年当初から県会議員を務め、晩年には貴族院議員も務めている。花巻では設立後まもなくの花巻銀行の頭取を務めたが(明治34年～41年)、それも当時花巻一であった彼の財力によるところが大きいと考えられる。

長男の倉之助は、花巻に製糸場を作ったり、東京に出て「梅津商会」を創業したりと様々な事業

表 5 納税額及び多額納税者順位

範 域	調 査 年 度	掲 載 者 数	瀬 川 弥 右 衛 門	梅 津 喜 八 ・ 東 四 郎	宮 澤 善 治	大 矢 馬 太 郎	金 田 一 勝 定 ・ 国 土	橋 本 喜 助	萬 昌 一 郎	小 原 多 助	松 田 忠 太 郎 ・ 忠 治	佐 々 木 勇 吉	箱 崎 庄 吉	佐 藤 秀 六 郎	島 和 右 衛 門	平 野 健 蔵
			農花 業巻 ・ 貸 金業	米上 穀町 商・ 貸金 業	荒鍛 物治 商、 元亮 棚	農盛 業岡	盛岡 会社 重役	呉上 服町 商	米和 穀買 商、 十二 彌村	農神 業買 八重 畑村	米花 穀巻 商町	上閉 伊那 郷野 町	東吹 子張 種製 造業	貸鍛 金業 町	荒豊 物巻 商町	米花 穀巻 商町
地 租	明治24年		652,187	706,798	155,022			280,634								
	明治31年		881,167	867,485	277,041	558,526	359,903	266,261								
	大正5年		3,172,000	2,298,000	1,641,000	1,299,000	1,213,000	450,000	979,000	943,000	580,000	543,000	172,000	421,000	449,000	351,000
	大正5年	112名	2	5	9	12	13	75	22	25	56	63	—	85	—	107
	明治24年	26名	2	1	16			8		—	—		—		—	
花 巻 内 郡 内 順 位	明治31年	26名	1	2	7	盛岡 3	盛岡 7	9		—	—		—		22	
	大正5年	20名	1	2	3	盛岡 2	盛岡 3	9	和賀 4	5	8	上閉伊 2	—	11	10	14
	明治24年	9名	2	1	7			5		—	—		—		—	
	明治31年	10名	1	2	5			6		—	—		—		9	
	大正5年	9名	1	2	3			5		4	4		—	7	6	8
所 得 税	明治25年		34,260	45,255			42,750	25,065								
	明治31年		83,325	137,010	32,160	137,025	124,980	32,250								
	大正5年		1,720,000	1,125,000	904,000	615,000	508,000	1,027,000	240,000	254,000	493,000	218,000	434,000	197,000	108,000	164,000
	大正5年	112名	3	9	18	27	36	11	102	90	40	112	50	—	—	
	明治25年	12名	3	1	—		盛岡 7	5		—	—		—		—	
花 巻 内 郡 内 順 位	明治31年	21名	2	1	10	盛岡 3	盛岡 5	9		—	—		—		—	
	大正5年	20名	1	2	4	盛岡 5	盛岡 7	3	和賀 10	8	6	上閉伊 2	7	11	—	12
	明治25年	7名	2	1	—			4			—		—		—	
	明治31年	13名	2	1	7			6			—		—		—	
	大正5年	15名	1	2	4			3		5	5		6	8	—	9

注) 表中の税額以外の数字は、多額納税者一覽表の掲載人数中における順位を表す。「一」は掲載人数に含まれていないこと、空欄は地域が異なるため該当しないことを示す。ただし他地域の者については、「盛岡 2」などと記し、その地域内での順位を示した所もある。また税額の欄における空白は、資料がないことを示す。

出典：『資産家地主総覧』を元に筆者作成

表 5 続き

範 域	調 査 年 度	掲 載 者 数	平 賀 千 代 吉、ソル	佐 藤 金 治	佐 藤 伊 惣 治	阿 部 理 吉	宮 澤 政 次 郎	佐 藤 庄 兵 衛	佐 藤 庄 助	梅 津 友 蔵	市 野 川 周 助	梅 津 善 次 郎	三 鬼 鑑 太 郎	大 場 永 吉	菊 池 忠 太 郎	阿 部 晃
			釀 鍛 花 造 治 口 町 業 町 町	米 花 穀 春 川 口 町 商 町 町	米 花 穀 春 川 口 町 商 町 町	農 業 業 春 川 口 村	呉 服 豊 春 川 口 町 古 着 商 町 町	鍛 花 治 町 口 町 治 町 口 町	呉 服 春 川 口 町 商 町 町	保 險 春 川 口 町 會 社 代 理 店	陶 器 春 川 口 町 商 町 町	鉢 上 花 春 川 口 町 鉢 上 商 町 町	會 社 春 川 口 町 社 重 役	小 花 春 川 口 町 間 物 商 町 町	花 城 春 川 口 町 社 役 員	小 ↓ 稗 實 郡 湯 口 教 員 村 長
地 租	明 治 24 年		206,818			170,376										
	明 治 31 年		219,045			159,317		126,380								
	大 正 5 年		182,000	259,000	238,000	213,000	129,000		67,000	52,000	37,000	44,000	0	18,000		
	大 正 5 年	112 名	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	明 治 24 年	26 名	11	—	—	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
花 巻 内 順 位	明 治 31 年	26 名	13	—	—	16	—	23	—	—	—	—	—	—	—	—
	大 正 5 年	20 名	—	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	明 治 24 年	9 名	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	明 治 31 年	10 名	7	—	—	—	—	10	—	—	—	—	—	—	—	—
	大 正 5 年	9 名	—	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
所 得 税	明 治 25 年		16,515													
	明 治 31 年		54,075					15,210								
	大 正 5 年		209,000	127,000	89,000	96,000	151,000		78,000	74,000	42,000	34,000	39,000	19,000		
	大 正 5 年	112 名	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	明 治 25 年	12 名	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
花 巻 内 順 位	明 治 31 年	21 名	5	—	—	—	—	21	—	—	—	—	—	—	—	—
	大 正 5 年	20 名	9	20	—	—	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	明 治 25 年	7 名	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	明 治 31 年	13 名	4	—	—	—	—	13	—	—	—	—	—	—	—	—
	大 正 5 年	15 名	7	15	—	—	11	—	—	—	—	—	—	—	—	—

に取り組むも、若くして亡くなっている。

代わりに父の後を継いだ次男の東四郎は、家業の傍ら花巻でシールド工場や煉瓦工場を興した。さらに本人は、表3のように花巻の様々なインフラ事業に参画するほか、盛岡銀行、岩手軽便鉄道、花巻温泉など大会社の重役も歴任した。しかも、30代で既に父の後を継ぎ花巻銀行の役員に就く（由井・浅野：1989）など、若い頃から町の中での要職に名を連ねていることがわかる。表3によると恐らく、鉄道は事業開始の昭和45年から大正11年まで通して、電気も事業開始の昭和45年から盛岡電気工業に吸収される大正10年まで通して、取締役として携わり、電鉄は大正7年と15年いずれの時期も関わっている。また大正6年から、少なくとも資料の得られた大正15年までは、町会議員を務めている。

総合花巻病院に賛助している健吉は、東四郎の後を継いだ長男である。

次に、「山喜」の財力を見て行こう。表3によると、鉄道への投資は539株と稗貫郡内では2番目に高額で、電気への投資は599株と筆頭株主になっている。表5を見ると、地租では、明治24年には既に稗貫郡、花巻川口町・花巻町を合わせた地域（以後、便宜上「花巻」と記す）でともに1番目に名が挙がっており、明治31年には花巻町の瀬川弥右衛門に若干追い越され、稗貫郡・花巻で2番目となっている。大正5年には代替わりして梅津東四郎の名前が見られ、県内で5番目、郡内・花巻では2番目に名が挙がっている。所得税は、明治25年は稗貫郡、花巻ともにトップであり、明治31年も稗貫郡、花巻どちらもダントツの金額で1番目に名前がある。大正5年は県内で9番目、郡内・花巻では瀬川弥右衛門にトップの座を譲り2番目であった。また明治31年の岩手県内の多額納税者一覧表では881円167銭で4番目に名を挙げており、上位5人中他の4人は農業者であることから、この時期、県内の事業者の中では最も納税額が大きかったことがわかる。

納税額の推移を見てみると、地租は明治24年の706円798銭から明治31年の867円485銭、大正5年の2298円へと、明治後期から大正初期にかけての伸びが著しい。大正5年の資料によると、この頃には地主として稗貫郡内はもとより、和賀郡、紫波郡、上閉伊郡、そして釜石までも所有地を広げている（渋谷：1989）。さらに所得税は、明治25年の45円255銭から明治31年の137円010銭、大正5年の1125円へと、最初の6年間では3倍に、次の18年間では約8倍にも増加している。物価の変遷も考慮に入れなければならないが、他の納税者の増加率と比べても、彼の納税額の増加率は特筆すべきであろう。

梅津喜八は、町の電気事業や電鉄、軽便鉄道の事業が始まる前に亡くなっている。その父の後を継いだ次男の東四郎が、家業を盛り立てて県下有数の豪商「山喜」を守り土地財産を増やすと同時に、町の様々な役職や大会社の重役を務めて行ったのがこの時期であったと言える。

(ii) 花巻町「松屋」の瀬川弥右衛門

「松屋」の瀬川家は、花巻町一の豪農であった。

瀬川弥右衛門は、明治から大正期に名を成した人物（万延元年 [1860] ～大正11年 [1922]）だが、大正末年から昭和のはじめにかけて活躍したその息子が同じ名を襲名している。表3では、世代交代の時期が判然としないため同一人物として扱ったが、先代は大正11年に亡くなっていること

から、表の途中で息子に代替わりしていることは確かである。

先代の方の弥右衛門は、花巻電気会社（恐らく、明治45年の開業から大正10年の吸収合併まで通して取締役）や電鉄、さらには盛岡電気工業や岩手軽便鉄道の重役も歴任しており、明治42年から大正10年にかけては花巻銀行の頭取を務めている。

息子の方の弥右衛門に代替わりしたと考えられる大正11年前後には、県下第一の多額納税者となっていた（八木：1955）。大正12年の総合花巻病院への賛助や、大正15年の花巻電鉄役員就任をしているのは、息子の方の弥右衛門であろう。彼は、大正14年には30代前半という若さで貴族院議員に立候補してから3期21年間を務め上げており、その間岩手軽便鉄道の国有化のために尽力した。

表3で「松屋」瀬川弥右衛門の各種事業への投資額を見ると、鉄道への投資は648株と岩手軽便鉄道社長である金田一勝定の600株より多い。電気への投資は瀬川弥右衛門本人は全く行っていないが、その家族となっている瀬川周蔵（続柄は確認できていない）が495株を投資しており、額の大きからしても、これが「松屋」としての投資であったと考えられる。

次に表5を用いて岩手県内や稗貫郡内、花巻内での「松屋」の地位を見ると、前項でも述べたように地域での首位を巡って「山喜」の梅津喜八と一進一退を繰り返している。地租では明治24年は稗貫郡内、花巻ともに梅津喜八に次ぐ2番目だったが、明治31年には稗貫郡・花巻で1番目、さらに大正5年には稗貫郡・花巻で1番目はもちろんのこと、県内でも2番目となっている。また所得税では、明治25年は稗貫郡において梅津喜八、大迫の豪農岩亀半蔵に次いで3番目であったが、明治31年には岩亀半蔵を抜いて郡内で2番目になり、大正5年には稗貫・花巻でトップ、県内でも3番目となった。

瀬川弥右衛門の納税額の推移を見てみると、地租は明治24年の652円187銭から明治31年の881円167銭、大正5年の3172円へ、所得税は明治25年の34円260銭から明治31年の83円325銭、大正5年の1720円へと増加している。特に明治31年から大正5年にかけての所得税の増加率は、梅津喜八の増加率以上に目を見張るものである。この時期に、農業（地主）のみの生業から、貸金業のウエイトを大きくしていったのではないかと考えられる。

Ⅲ 宮澤善治と「宮澤商店（宮善）」

花巻川口町の鍛冶町にある「宮澤商店（宮善）」の宮澤善治（安政元年〔1854〕～昭和14年〔1939〕）は、祖父弥兵衛（文化12年～明治32年）が始めた米屋を継ぎ、鍛冶町で屈指の商店に成長させた。彼の代には荒物商に転じ、石油と煙草を扱って煙草の元売捌店となり、さらに塩・砂糖の元売捌も行った。商業の傍ら、地主として県内の山林原野を手中に納めていったとされ、後には県内でも指折りの多額納税者となった。明治22年の花巻川口町第一期町議会から、町会議員を務めている。資料（花巻川口町町議会会議録）が得られた明治34年（それ以前の記録は残っていない）以降、大正15年までの間、一期も欠かさず町会議員を務めているのは彼のみである。明治32年には45歳の若さで花巻銀行の頭取に就任しており、その後、電気、電鉄などの役員を務めた。花巻電気会社では恐らく、明治45年の開業から大正10年の吸収合併まで通して、取締役を務め上げている。

長男の直治（明治12年～昭和30年）は、大正5年頃に家業や町会議員職、会社の役員などを父善

治から引き継いだ。宮澤家では、明治22年から始めた善治、次に直治、そしてその長男の史郎へと、町会議員を一期も欠かしていないことになる。また直治は、昭和15年から1期、花巻川口町と花巻町が合併した後の花巻町の町長を務めている。

表3によると、鉄道への投資は358株、電気への投資は400株と、いずれも梅津喜八や瀬川弥右衛門に次いで花巻で3番目の額である。次に表5によって、岩手県内や稗貫郡内、花巻での宮澤商店の地位を見てみよう。地租では、明治24年は稗貫郡で16番目、花巻では8番目に名が挙がっていたが、明治31年には稗貫郡では7番目、花巻では5番目と、順位を上げている。所得税では、明治25年には稗貫郡12名中に名前はないが、明治31年には稗貫郡21名中10番目、花巻では13名中7番目に名前がある。そして大正5年には、「地租税納税者」では9番目（郡内・花巻では3番目）、「所得税納税者」でも県内で18番目（郡内・花巻ではともに4番目）と、郡内でも5本の指に入るまでに成長している。大正5年の資料によって家の経営を見てみると、この頃宮澤商店は元売捌業の範囲を県内外に広げているとともに、地主としての勢力も稗貫郡内にとどまらず和賀郡、上閉伊郡などに及んでいる（渋谷：1989）。

このように、本研究で対象とした明治中期から大正末期にかけては「宮澤商店」が地域における地位を高めていった時代であったこと、そして宮澤善治がちょうど40代後半から60代にかけての壮年期を過ぎた時期であったことなどが、町のインフラ整備への積極的な参画の一因になったと考えられる。

(iv) 小括

以上の3つの家は、多額納税者一覧表に常に名を載せるほどの財力を有した上で、町の基盤整備事業のほとんどに携わっている。また表3からわかるように、代替わりの際、若年の後継者にも諸事業の役員を後継させており、彼らが個人としてではなく、家として、町の中での期待された役割を担っていることがわかる。

さらに表5の明治20年代半ば、明治31年、大正5年、それぞれの納税額からは、3つの家がこの時期に如実に家業経営を拡大させていることがわかる。インフラ整備がこの経営拡大を生んだという面と、その利益がさらに彼らの地域で果たすべき役割を確実にしさらなるインフラ事業への資本投資に向かわせたという面によって、彼らは花巻の都市化の立役者に仕立て上げられていったとも言えよう。

(2) 2つ以上の事業に参画している人物・家

ここでは、上述した3軒以外の人物（家）について、2事業への役員就任者、1事業への役員就任かつその他の事業への投資をしている者、役員就任は無いが複数の事業へ投資している者、の順で考察して行く。

(i) 2事業への役員就任者

まずは、2つの事業において役員に就任している宮澤政次郎、市野川周助、金田一勝定・国土、菊池忠太郎、萬昌一郎、佐々木勇吉、佐藤庄兵衛、大矢馬太郎の8名（軒）について検証する。

宮澤政次郎（電気・電鉄で役員、鉄道・電気・病院に投資）は、花巻川口町の豊澤町で呉服・古着商を営む商人であった。大正6年、43歳の時に町会議員に就いている。主に町村合併に尽力したほか、学務委員、民生委員、調停委員を歴任した（花巻病院:1963）。表5を見ると、大正5年の時点で、所得税が郡内14番目、花巻では11番目の額となっている。

市野川周助（電気・電鉄で役員、鉄道・電気・病院に投資）は、花巻川口町の下町で陶器商を営んでいた。明治36年から大正13年までは、町会議員を務めている。慶応2年〔1866〕の生まれで、様々な事業に関わり始めた大正半ばは、50代の中頃であった。多額納税者一覧表には名前は見受けられず、納税金額を見ても家の商売の規模が大きくなかったことがわかる。

金田一勝定・国土親子（鉄道・電鉄で役員、鉄道に大きな投資、電気にも投資）は盛岡の財閥で、岩手軽便鉄道をきっかけに花巻の事業に関わるようになり、やがては花巻温泉開発を成し遂げた。表5によると、大正5年の納税額は、地租・所得税どちらも盛岡では指折りの高さである。ただし前述した花巻の梅津・瀬川・宮澤（善治）ほどの額ではない。

菊池忠太郎（電気・電鉄で役員、病院に投資）は、花巻の近在である和賀郡小山田村に生まれ、一度東京に出るも地元の発展のために花巻に戻り、様々な分野で活躍した人物である（佐々木：1989）。公職としては県会議員を歴任している。花巻では、電気事業で社長職を務めたほか、花巻高等女学校の誘致や総合花巻病院の設立に尽力した（花巻病院:1963）。多額納税者一覧表には登場しない。

萬昌一郎（鉄道・電鉄で役員、鉄道に大きな投資、電気にも投資）は、花巻の近在である和賀郡十二鎭村で米穀商を営む人物であった。表5で大正5年時点の納税額を見ると、所得税・地租ともに十二鎭村内で1番目、特に地租は県内でも22番目に高額であり、村内で一番大きな地主であったことがわかる。

佐々木勇吉（鉄道・電鉄で役員、鉄道に大きな投資）は、遠野町で貸金業を営んでいた。地租・所得税ともに遠野では最も高額の納税者であり、上閉伊郡の中でも釜石製鉄所の横山久太郎に次いで2番目の額である。岩手軽便鉄道の沿線・遠野の町で一番の豪商が鉄道事業に参画し、遠野電気工業の吸収合併に伴い盛岡電気工業の役員にも就任し、その関係で後期花巻電鉄の役員陣にも加わった、という経緯であったと考えられる。

佐藤庄兵衛（電信で尽力、電気で役員、投資なし）は、鍛冶町で商売を営んでいた。大正2年に没しているが、後継者の名前がわからず、その後の彼の家の盛衰については確認できていない。彼自身は、遅くとも（資料が得られた）明治34年以降、大正元年まで町会議員を務めている。電信局設置に尽力したのは27歳の時であるということがわかっており（熊谷:1968）、また県立花巻高等女学校の誘致設立のために尽力したというエピソードも残っていることから（花巻病院:1963）、若い頃から町の発展のために活動していたことがわかる。表5を見ると、明治31年の時点では地租・所得税ともに花巻で10番目前後に名簿に名が載っており、大正5年の名簿にも後継者の名で載っている可能性がある。

大矢馬太郎（鉄道・電鉄で役員、投資なし）は盛岡で50町歩以上の土地を持つ豪農で、盛岡でも

様々な役職を務めている。岩手軽便鉄道事業への参画は盛岡の豪農としてのものだったと考えられるが、盛岡電気工業に吸収される以前の花巻電鉄の運営に参画していることについては、経緯がわからない。表5からは、大正5年に地租・所得税ともに盛岡で5本の指に入る納税者であったことがわかるが、金田一家と同様、花巻の梅津・瀬川・宮澤（善治）に及ぶ額ではない。

以上見てきた8名（軒）について若干まとめよう。大矢馬太郎、金田一勝定・国土、萬昌一郎、佐々木勇吉の4名（軒）は花巻の外部の人で、彼らはいずれも鉄道と電鉄事業の経営への参画者であり、また、県内でも多額納税者として上位に位置する人物達であった。従って彼らは、主に岩手軽便鉄道事業をきっかけに花巻の事業に携わるようになった、他地域の有力者達と言えよう。宮澤政次郎、佐藤庄兵衛、市野川周助は花巻川口町の商人で、家業経営の規模は中くらい、もしくは小さいものであったが、いずれも町会議員を務めていたのが共通点である。菊池忠太郎は、家柄ではなく実力で役職に就き、地域の発展のために尽くした人物と言える。

(ii) 1 事業への役員就任者

次に、本論文で取り上げた事業の中で、役員として参画した事業は1つであるがそれ以外の事業へ投資を行っている家を取り上げる。橋本喜助、三鬼鑑太郎、平賀千代吉・ツル、松田忠太郎・忠治、梅津友蔵、梅津善次郎、阿部晁の7軒である。

橋本喜助（電気で役員、鉄道・電気に大きな投資、病院にも投資）は花巻川口町の上町にある「大津屋」の創業者で、明治5年の開業から呉服屋を営み、盛岡の店にも品物を卸すなど手広く商売をしていた。長男が早逝したため、孫が橋本喜助を襲名し店を継いだ（八木:1951）。表3では橋本喜助を1人の人物として扱っているが、電気事業への参画が大正9年の時点では一時途絶え翌年から復帰していることから、大正10年からは2代目喜助による活動であったと推察される。大正10年から少なくとも2期、町会議員を務めているのも、2代目喜助かと考えられる。表5を見ると、いずれの時期も多額納税者一覧表に名を挙げており、郡内・花巻では一ケタ台を保っていることがわかる。大正5年の時点では、地租は上位3軒の納税額とは大きな開きがあるが、所得税は郡内・花巻で3番目、県内でも11番目に入っている。明治31年から大正5年にかけて地租納税額を大きく伸ばした花巻の上位3軒と異なり、主に商売で利益を挙げている点が特筆できよう。

三鬼鑑太郎（鉄道で役員、鉄道に大きな投資、電気・病院にも投資）は、福島で生まれ岩手県庁で定年まで働いた後に岩手軽便鉄道の常務として招かれた人物で、以来花巻町に住み功績を残した。多額納税者表に名前はない。

花巻川口町の鍛冶町で江戸時代から醸造業を営む平与醤油店（電鉄で役員、鉄道・電気・病院に投資）は、10代目が平賀与助、11代目が千代吉である。ツルの続柄はわからないが、大正5年時点での後継者であったと考えられる。与助は、遅くとも（資料の得られた）明治34年から、明治40年まで、町会議員を務めている。千代吉は長年稗和（稗貫・和賀郡）西部耕地整理組合の理事長を務めた（八木:1951）。納税額では花巻の上位3軒ほどの劇的な増額はないが、明治20年代の頃からある程度の額を納税していることから、着実に醸造業を営んできたものと思われる。

松田忠太郎（電気で役員、鉄道・電気に大きな投資、病院にも投資）は、花巻町で米穀商を営ん

でいた。昭和10年の花巻川口町・花巻町合併の前後には町会議員として活躍し4元老の1人と言われ、長年消防団長や稗貫郡畜産組合長等も勤めた人物であった(八木:1951)。表5によると、多額納税者一覧表には大正5年の時点で初めて登場するが、花巻において地租は4番目、所得税は5番目の納税額で、これらは花巻町においてはともに瀬川弥右衛門に次ぐ高額であったことから、彼が地域で急速に台頭したことがわかる。

梅津友蔵(電気で役員、電気に大きな投資、鉄道にも投資)については、花巻川口町で保険会社代理店を営んでいたことがわかっている。また大正2年から5年まで、町会議員を1期務めている。表5で納税額を見ると、前述の市野川周助と同様、さほど大きな商売を行っていたわけではないようで、多額納税者一覧表にも名前は出てこない。

梅津善次郎(電気で役員、電気・病院に投資)は、士族の町長が続いていた花巻川口町において初めて町人出身で町長(大正10年～昭和8年)となった人物で、家は花巻川口町上町で鋳物屋を営んでいた。表5によると、多額納税者一覧表には載っておらず、地租・所得税ともにそれほど高額ではないことから、こちらも店の規模は大きくなかったことがわかる。

阿部晃(電気で役員、病院に投資)は花巻小学校の代用教員を約20年間勤めた人物で、晩年に湯口の村長(大正13年～昭和9年)となった。多額納税者一覧表には登場していない。

以上の7名(軒)についてまとめると、橋本喜助、松田忠太郎・忠治は、梅津喜八、瀬川弥右衛門、宮澤善治に次ぐ花巻の大手であり、2軒ともそれぞれの町で町会議員を長らく務めるなど、町に欠かせない人物であった。また老舗の平与は数期に渡り町会議員を務めており、梅津友蔵は店の規模は小さいがこちらも町会議員にもなった人物であった。三鬼鑑太郎、梅津善次郎、阿部晃は、家柄ではなく彼ら自身の立身出世に伴い、これらの事業に携わっていった人物達だった。

(iii) 複数の事業への投資者

最後に、役員は1つも務めていないが、複数の事業に資本投資をしている人物10名について見て行きたい。

佐藤秀六郎(鉄道・電気に大きな投資、病院にも投資)は、花巻川口町鍛冶町で貸金業を営んでいる。納税額は、花巻で地租は7番目、所得税は8番目に高額である。明治12年生まれであり、地域で活躍するには、本論文の対象時期は年齢的にまだ早かった可能性も考えられる。

平野健蔵(鉄道・電気・病院に投資)は花巻町の米穀商で、花巻町の町会議員を務めている。納税額は、花巻で地租は8番目、所得税は9番目に高額である。明治23年生まれであり、佐藤秀六郎と同様、地域で活躍するには年齢的にまだ早かったと考えられる。

佐藤伊惣治(鉄道・電気・病院に投資)は花巻町で指折りの米穀商で、長年花巻町の町会議員を務め、花巻川口町・花巻町合併の際には4元老の1人といわれた。多額納税者一覧表には登場しない。彼も明治12年生まれであり、地域で活躍するにはまだ若過ぎた可能性も考えられる。

箱崎庄吉(鉄道・電気・病院に投資)は菓子種製造業で家業を盛り立てた人物で、地租は目だって高額ではないが、所得税は花巻で6番目、県内でも50番目の納税額とされている。政治的な場所に参加することを好まなかった(八木:1955)らしく、各事業の役員に就いていないのもそれが理

由と考えられる。

小原多助（鉄道に大きな投資、電気にも投資）は稗貫郡八重畑村の大地主であった。大正5年、多額納税者として名簿に載っており、特に地租は県内でも25番目の額である。

島和右衛門（電気・病院に投資）は花巻川口町豊澤町で荒物商を営み、大正6年から13年まで2期町会議員を務めている。大正5年、地租の額が花巻で6番目となっており、商売の他に土地も持っていたことがわかる。

阿部理吉（鉄道・電気に投資）は、花巻近在の湯口村の地主であった。地租では多額納税者一覧表に名前が載っている。

佐藤庄助（鉄道・電気に投資）は、花巻川口町で呉服商を営んでいた人物である。明治35年から大正元年まで、町会議員を務めている。多額納税者一覧表には登場せず、店の規模は大きくなかったことがわかる。

大場永吉（鉄道・電気に投資）については、花巻川口町で小間物商を営んでいたことがわかっている。地租・所得税ともに小額で、店の規模は小さかったと考えられる。彼についてはその他の情報は得られていない。

佐藤金治（鉄道・電気に投資）は、花巻川口町で米穀商を営んでいた。多額納税者一覧表には、大正5年に地租9番目・所得税15番目（ともに花巻における順位）で登場しており、この頃急速に栄えた家とも考えられる。

以上10名を見渡すと、近在の八重畑村の豪農小原多助と、湯口村の農業阿部理吉を除けば、花巻の中小規模の商人がほとんどであることに気付く。各インフラ事業へ資本投資をしながら、彼らが役員に就任しなかった理由についてはいくつか想定されるが、佐藤秀六郎、平野健蔵、佐藤伊惣治のように、いずれも明治前半生まれであった人物については、本論文の対象時期にはまだ若過ぎたという理由も考えられる。また箱崎庄吉のように、政治的な場に出ることを好まず、周りに推されてもそれを辞していた例も見られたようである。島和右衛門、佐藤庄助らは大正5年の前後に町会議員を務めており、その立場からの資本投資であったことも考えられる。残る大場永吉・佐藤金治については資料が少ないため、特に大場については、家業の規模が小さいにもかかわらずインフラ事業への投資を行っていた理由も推察しかねた。

(3) まとめ

本節を振り返ってみると、まず、はじめに取り上げた3つの家は、多額納税者一覧表に常に名を載せるほどの財力を有した上で、ここで取り上げた町の基盤整備事業のほとんどに携わっていた。さらに個人としてではなく家として、町の中での期待された役割を担っていることがわかった。

次に、2つの事業において役員に就任している8名（軒）のうち4名（軒）、大矢馬太郎、金田一勝定・国土、萬昌一郎、佐々木勇吉は、主に岩手軽便鉄道事業をきっかけに花巻の事業に携わるようになった、他地域の有力者達であった。役員には就かなかつたが鉄道への多額の投資を行った、花巻近在の村の小原多助も、彼らと同様の立場とみなしてよいだろう。同じく花巻近在の村の農業

阿部理吉は、彼らほどの財力はないが、鉄道と電鉄に投資している点が共通している。

梅津喜八、瀬川弥右衛門、宮澤善治に次ぐ花巻の本店であり、町で町会議員を長らく務めた橋本喜助、松田忠太郎・忠治は、役員として参画した事業は1つであるがそれ以外の事業へ投資を行っていた。

またその他に、家業経営の規模は中くらい、もしくは小さいものだが、町会議員を務めていたという人物は多かった。宮澤政次郎、佐藤庄兵衛、市野川周助（以上事業2つで役員就任）、平賀千代吉、梅津友蔵（以上事業1つで役員就任かつその他の事業への投資）、島和右衛門、佐藤庄助（以上役員就任は無いが複数の事業への投資）、の7名である。

複数の事業へ資本投資はしているが、本論文の対象時期にはまだ若手で、役員就任まで及ばなかったのではないかと考えられるのは、佐藤秀六郎、平野健蔵、佐藤伊惣治らである。

家柄ではなく自らの立身出世に伴い、これらの事業に携わっていった人物達としては、菊池忠太郎、三鬼鑑太郎、梅津善次郎、阿部晃などが挙げられる。また、財力はあるが政治の表舞台に出ることを好まず、役員就任を断り資本投資のみに徹しているという、箱崎庄吉のような例も見られた。残る2名、大場永吉、佐藤金治については、今回得られた資料からは詳しいことはわからなかった。

以上挙げた点を総合的に見て、とりわけ、

- ・鉄道、電鉄事業は、事業の性格上、花巻町人以外の資産家の投資が多く見られる点
- ・中小規模の商人でインフラ整備に関わっている人には、町会議員を務めている人が多い点

が特徴として挙げられる。

他方で、表5の大正5年地租の欄を見ると、花巻での順位9位までの人が全てここで検証した人々の中に含まれていることがわかる。つまり、大正5年の「稗貫郡多額納税者一覧表 地租納税者」に記された20名のうち花巻町人は9名を占めているが（渋谷：1989）、その9名が全員、花巻のインフラ事業に2つ以上参画しているということである。多額投資かつ役員就任、もしくは多額投資のみ、役員就任かつ小額投資など、形はそれぞれであるが、彼ら9名全員がインフラ整備に携わっている。その9名の他に、さほど財力はないが町会議員を務めていた人物や、花巻以外の地域の資産家が加わって、表3のような花巻インフラ整備担い手集団が成り立っていたのである。

さらにその中でもやはり、多額納税者一覧表の上位にある数名が、表3でも始めの方に名が挙がっている、つまりインフラ整備への特に積極的な関わりを示している。投資額も、他の人々と比べて著しく高額である。インフラ整備が彼らの家業の経営拡大を生み、その利益によって地域において担うべき役割がさらに確固たるものとなり、彼らはまた新たなインフラ事業への資本投資に向かう。このような循環が、彼らを花巻の近代化の立役者に仕上げていったと言える。

また一方で、箱崎庄吉のように政治的な表舞台に出ることを好まず、独自の手法で町の発展に尽くしたといわれている人がいる（八木：1955）ことを鑑みると、公式の名簿や表などには表われてこない人々の活動を拾い上げる工夫の必要性を感じる。

5. おわりに

花巻のインフラ整備に関わった人々は主に、花巻町人の中で多額納税者として名を挙げている人々と、財力はさほどではないが町会議員などを務める人々、そして花巻以外の地域の資産家から成っていた。そしてその中でも、財力のある花巻町人数名が、様々な事業に大きく投資し、その経営にも関わっていることがわかった。

最後に、花巻町人たちがそれほどまでに町の近代化に尽力し、花巻を商業町として盛り立てることに熱心であった理由を考えてみたい。

かつて南部藩の支城が置かれ城下町として発展していた花巻の町は、明治の廃藩置県の後には岩手県内18郡役所の一つを置く町に過ぎなくなっていた。城下町として名を成し、管轄である南部藩の南地域のセンターとしての役割を果たす上で、人々の集積を支えてきた江戸期における立場と、明治期の岩手県内で置かれた地位との格差が、後に花巻町人をして、私費を投じてまでの近代化事業に固執せしめたという捉え方ができるであろう。また明治・大正時代を通じて、花巻町人が県下でも指折りの豪商・豪農として名を挙げてゆくのは、江戸時代に確立した基盤の所以でもあり、一方ではかつて城下町として栄えた花巻の商人としてのプライドの結晶でもあったと考えられる。

【引用文献】

後藤靖編『銀行会社要覧』第1、4、7巻、東京、柏書房、1989。

花巻病院『花巻の先哲―財団法人花巻病院創立40周年記念編集―』、岩手、1963。

石井寛治『情報・通信の社会史：近代日本の情報化と市場化』、東京、有斐閣、1994。

石川一三夫『近代日本の名望家と自治』、木鐸社、1987。

吉良芳恵「京浜電気鉄道・横浜市街電気鉄道の出願をめぐって―横浜市民の投資行動を中心に―」横浜近代史研究会編『近代横浜の政治と経済 第2集』、1993。

熊谷章一『花巻市史』、岩手、1968。

熊谷章一『花巻市上町の歴史』、岩手、1972。

森嘉兵衛『岩手近代百年史』、岩手、熊谷印刷、1974。

内藤辰美「都市小樽の再生産と階層・コミュニティ―名望家と労働者・下層民―」社会移動研究会『近代都市の創出と再生産―小樽市における階層構成を中心に―』、2005。

老川慶喜「横浜鉄道の計画と横浜経済界」横浜近代史研究会編『近代横浜の政治と経済 第2集』、1993。

佐々木幸夫『栄光の軌跡花巻電鉄』、岩手、熊谷印刷、1989。

渋谷隆一編『都道府県別資産家地主総覧岩手編』、東京、日本図書セレス、1988。

総合花巻病院創立80周年記念写真集編集委員会『財団法人総合花巻病院創立80周年記念写真集』、岩手、2004。

高久嶺之介『近代日本の地域社会と名望家』、東京、柏書房、1997。

八木英三『花巻町政史稿―花巻市制施行記念』、岩手、1955。

八木英三『稗貫風土記人物篇』、岩手、1951。

横浜近代史研究会編『近代横浜の政治と経済 第2集』、1993。

由井常彦・浅野俊之編『日本全国諸会社役員録』、東京、柏書房、1988、1989。

【註】

- (1) 近代の横浜における様々な事業の歴史的経緯を検証した『近代横浜の政治と経済』(1993)の中で、吉良は、電鉄の敷設出願・許可に携わった関係者の動向を追いながら、末尾にその発起人らの職業や電鉄事業への出資株数をまとめた一覧表を載せており、地域の社会構造とその中で生活する個人の位置関係を垣間見ることが出来る。最後に吉良は、「時代の先を読み、新種の企業、たとえば新しい交通機関に投資すること、あるいはその先願権を得ること、つまり投機的な行動のみが、彼らの行動原理であった」(吉良：1993)と、商工業者の電鉄事業参画の動機を、本人達の利益の追求に還元している。また、同じ研究会に属する老川(1993)も同様の問題意識で論を進めており、横浜鉄道の成立とその後の経緯について考察する際、同鉄道が「横浜経済界にどのような意義を持ったか、あるいはいかなる意味で横浜商人の利益が守られたか」という点を検証する必要性を説いている(老川：1993)。彼らの研究は、当時の実業家の行動原理を、経済的要因に求めるものと言えよう。
- (2) 筒井正夫は「名望家支配」について、「地主や豪農層が経済的支配関係を強めれば強めるほど彼等はその正当性の根拠を単なる社会的出自(家柄)や財産の富裕さといった要因に求めるわけにはいなくなるであろう。そこで彼等はその政治的並びに社会的行為を通していかに社会全体の公共の利益に貢献しているかを示し、そのことによって自らの存在を社会的名誉・名望に値するものとして民衆に認知させることに腐心する」(筒井：1989)と述べている。
- (3) 石川一三夫『近代日本の名望家と自治』(1987)、高久嶺之介『近代日本の地域社会と名望家』(1997)など。
- (4) 和田・小早川・塩見論文(1992)は、『会社役員録』を用いて大正期の名古屋市の企業役員就任グループを検証した研究であるが、『会社役員録』の使い方について参考になった。
- (5) 明治の最初期、旧南部藩に「盛岡県」「花巻県」「三戸県」「伊沢県」の4県が置かれた際には、花巻城には「花巻県」の役所が置かれた。その体制は5ヶ月しか続かず、次は「部令所」(出張所のようなもので盛岡の所管内5箇所[盛岡、沼宮内、日詰、花巻、沢内]に置かれた)としての役割を果たしていた。
- (6) 大迫は釜石街道の宿駅として古くから栄えた町で、江戸時代には代官所がおかれていた。また黒沢尻(今の北上市)は花巻から10キロほど南に下った北上川流域にあり、南部藩政時代には御蔵奉行が置かれ、上流を航行する小操舟から下流を航行するひらた舟に荷物を積み替える拠点となっていた。とはいえ大迫・黒沢尻はいずれも、和賀稗貫両郡2万石を所管していた花巻城の統治下の町であった。
- (7) 花巻町を代表する豪商「笹屋」(呉服商)の伊藤儀兵衛は、明治30年から1期7年間貴族院議員を務めた人物で、明治14年明治天皇の東北御巡幸の際に行在所を提供し、また東北線開通の際には花巻駅の用地を提供している(八木：1955)。
- (8) 岩手軽便鉄道の投資者は稗貫郡内で124名おり、30株以上では31名となる。稗貫郡内の投資家のうち4分の1の人々が、稗貫郡全体の80%以上の投資額を担っていることになる。
- (9) 花巻電気会社への投資者は、稗貫郡内で51名おり、10株以上では25名である。稗貫郡内の投資家の半分の人数で、稗貫郡全体の96%の投資額を担っていることになる。
- (10) ただし当時の町会議員は、被選挙権が納税額によって区別されており、一概に選出回数の過多を比べることはできない。花巻川口町の町会議員について、その区別を判別できる資料はまだ得られていない。

Local city commercial people's relations in modernization process

—Mainly the infrastructure maintenance at Hanamaki area in Iwate Prefecture

Akane Fukasawa
(Tohoku University)

The focus of this paper is applied to the characters of the people concerning the infrastructure maintenance at Hanamaki area in Iwate Prefecture from the middle of the Meiji to Taishou era.

Following five projects, which were carried out for the modernization, were picked up: 'a establishment of a telegraph station', 'a construction of a railway', 'a construction of electricity', 'a construction of an electric railway' and 'an establishment of a hospital'. And I investigated about the characters of the people who participated in or invest in these projects.

As a result, the people, who participated in the infrastructure maintenance, could divide into three groups. First group consisted of the people lived at central Hanamaki Town. They paid much tax. Second group consisted of the people lived at Hanamaki Town, they acted as a member of an assembly of their town but they were not so rich. Third group consisted of the people lived in suburbs, who were wealthy. Especially, some of the richest people in the first group invested much money in every project and participated in the managements of every project.

And the reason why people lived in Hanamaki town tried hard to modernize their town, was their pride as traditional merchants of Hanamaki town, which had been prospered as one of the castle town in Edo era.

Keywords : Modern city, Infrastructure maintenance, Merchant, Local community